

「モンゴルの野生動物：日本・モンゴル共同調査の成果」 の記録

A record of the exhibition of “Mongolian Wildlife: Findings of Japanese-Mongolia Joint Team”

高槻成紀¹, 鶴様智則²

¹麻布大学・獣医学部・動物応用科学科・野生動物学研究室, ²東京大学総合研究博物館

Seiki Takatsuki¹ and Tomonori Usaka²

¹ Laboratory of Wildlife Ecology and Conservation, Department of Applied Animal Sciences, Faculty of Veterinary, Azabu University,

² The University Museum, The University of Tokyo

Abstract: An exhibition entitled “Mongolian Wildlife: Findings of Japanese-Mongolia Joint Team” was held at Natural History Museum, Ulaanbaatar, Mongolia from July to November, 2008. The objectives were 1) to introduce the results of the past 6 year collaborative study on wildlife by the Japanese-Mongolian joint team, and 2) to contribute to educate citizens to realize the dangerous situation surrounding Mongolian wildlife and the importance of its conservation. The exhibition was composed of display of wildlife skulls and slide display by PC projector. The skull specimens were displayed in wooden boxes, and slide display showed the results of discovery of migration routes of Mongolian gazelle and shots of the field work. Key persons attended the opening ceremony including Dr. Chadraa, the head of the Mongolian Academy of Sciences, Y. Ichihashi Japanese Ambassador, Dr. Y. Hayashi, Director of the University Museum, The University of Tokyo etc. Dr. T. Masaoka, the president of Azabu University visited this museum and Science Academy of Mongolia to engage academic agreements.

Key words: conservation, exhibition, museum, wildlife

はじめに

2009年10月29日より麻布大学において「草原の国の動物たち：モンゴル」という展示をおこなうことになった。麻布大学では質の高い動物標本などを収蔵しているが、これまでは標本室を公開する程度の展示しかしたことがなかった。こうした中で2008年には新築された獣医学部棟にある展示コーナーで収蔵動物骨やプラスチックなどの常設展をおこなったのに次いで、2009年夏には「馬の治す道具たち」展を開催した(高槻, 本誌参照)。学術成果を展示という形態で表現することは、学内の他の研

究分野との交流や学生の教育にも効果があるばかりでなく、大学と社会との接点ともなる。そうした意味で、本学でもさらに展示がおこなわれることが望ましい。

今回実施される展示(以下、モンゴル展)にはその背景として2008年にモンゴルで開催された展示(「Mongolian Wildlife: Findings of Japan-Mongolia Joint Team」モンゴルの野生動物：日本・モンゴル共同調査の成果)がある。麻布大学におけるモンゴル展の企画者である高槻は2002年以来モンゴルにおいてモンゴル研究者とともに野生動物の生態学的調査を進めてきたが、その成果をモンゴル市民に還元したい



図1 モンゴル自然史博物館

という希望をもっていた。これが「アジア圏博物館ネットワークの構築, 1. モンゴル」というプロジェクトによって実現した。

高槻は有蹄類の生態学的研究をおこなってきた。おもに日本のニホンジカなどを研究してきたが、日本の湿潤な気候を反映して、ニホンジカは森林に生息する。これに対してモンゴルは平坦で乾燥した国土であり、草原が卓越する。そうした対照的な環境に生息する有蹄類としてモウコガゼルがいる。この動物は移動性が大きく、ある季節になると突如現れてまた消えてゆくといわれていた。しかしその移動実態はまったく不明であったため、衛星による自動追跡をおこなうことで、その移動ルートを解明することに成功した。こうした成果は科学論文として学術雑誌に公表したが (Ito et al., 2005), モンゴルは激しい環境変化が進行しており、こうした野生動物の保護は緊急を要する問題であり、その重要性を市民に理解してもらう必要だというのが高槻の考えであった。

一方、東京大学総合研究博物館はアジア・アフリカで野外調査をおこなうとともに、展示活動もおこなってきた。そうした流れの中で大学博物館のネットワークを構築し、そのセンターとなるという構想をもっていた。中国やモンゴルは地理的にも歴史的にも日本とつながりが深く、こうしたネットワークを展開する足がかりとしてはよい条件を備えている。

こうしたことから鶴坂を代表として日本とモンゴルの学術交流を推進し、博物館の交流を推進するプロジェクトを申請し、採択されてモンゴルにおける野生動物の展示に向けて活動することができることになった。以下はその記録である。

記 録

2007年7月11-30日と8月22-28日に高槻はモンゴルを訪問し、以下のことを行った。まず国立自然史博物館を訪問し、展示予定会場を下見した。次にモンゴル科学アカデミーを訪問し、標本整理の状況をきき、東京大学総合研究博物館へ寄贈される予定の標本を見た。また動物部門のラグバスーレン教授(部門長)と訪日の打ち合わせをした。

2008年1月25日から2月25日までモンゴル科学アカデミーのラグバスーレン博士を麻布大学に招聘した。この間、麻布大学において博物館学と動物生態学を修得してもらい、セミナーを開催した。また東京大学総合研究博物館に秋篠宮殿下が来訪されたときに同席してもらい、学術交流をしてもらった。そして、2008年の夏にモンゴル国立自然史博物館でおこなわれる展示についての打ち合わせをおこなった。また、展示試料の説明文の原稿を書くなどの共同作業をおこなった。

2008年5月には展示の準備のために5月にモンゴルを訪問し、会場の採寸などをし、展示すべき標本を決め、それを収める木製のケースの大きさなどを決めた。また東京大学総合研究博物館の西野嘉章教授のアドバイスで研究成果をプロジェクターで投影することとした。この間歇的投影については鶴坂が技術的アドバイスをした。またモンゴルの代表的な動植物の写真をラミネートで被ったプレートとしてファイルにし、モンゴル国内での地方名を調べることにした。

7月に展示を実施した。開催に際しては林良博東京大学総合研究博物館館長と高槻がモンゴル自然史博物館(図1)を訪問した。

会場には木製のケースを配置し、そこにモンゴル



図2 展示室(入口側より)



図3 展示室（奥より）



図4 ショーケース1から3

の野生動物の頭骨を展示した（図2～4）。

ショーケースは6つあり、1から3には大型の草食獣とくに角のある動物の頭骨を配した（図4）。4-6には大型肉食獣から小型の哺乳類までを、ガラス台

に並べた。

動植物の写真ファイルには英語とモンゴル語で名前を記入するページをつけ、これは差し替えができるようにした（図5、6）。



図5 植物のファイル



図6 動物のファイル

7月6日の開会式ではモンゴル科学アカデミー、国立公園関係者、P. D.モエールマン博士など野生動物研究者や支援機関関係者などが集まった。初めにモンゴル科学アカデミーのチャドラー所長から展示開催に謝辞と祝辞が述べられた（図7）。次に市橋康生日本大使から学術交流の意義についての意義を含め祝辞が述べられた（図8）。また林良博東京大学総合研究博物館館長からは共同開催について挨拶があった（図9）。最後に高槻が展示の趣旨説明をし、展示を案内した。

またモンゴル自然史博物館から高槻に展示開催企画に対して感謝楯が贈られた（図10）。

展示では日本とモンゴルの研究成果を5分ほどのスライドにまとめこれを投影した（図11）。博物館

の展示は標本が中心になり、生態学のダイナミズムを伝えるにいが、こうしたスライドはそれを補うのに有効であり、野生動物の躍動や野外調査の臨場感が伝わってきた。

その後7月20日には麻布大学の政岡俊夫学長と菅沼国際協力委員会委員長がウランバートルを訪問し、モンゴル科学アカデミーにおいて、生物科学研究所のジャンチフ所長、モンゴル国立大学のサミヤ副学長、モンゴル自然史博物館のゾリグバートル館長、フスタイ国立公園のバンディ所長と会見し、それぞれ学術交流協定を締結した（図12）。生物科学研究所での会見では、田名部雄一麻布大学元教授の話題が出た。田名部先生はモンゴル訪問が困難であった時代にオオカミの遺伝学的研究で共同研究を実践し



図7 モンゴル科学アカデミーのチャドラー所長



図8 市橋日本大使



図9 林東京大学総合研究博物館館長



図10 感謝楯を送られる高槻（右）

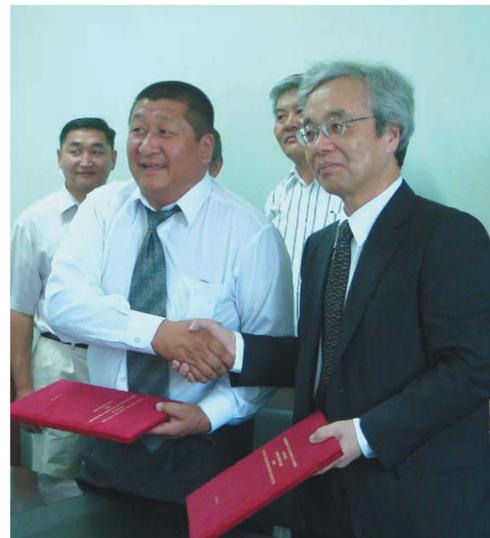


図12 学術交流協定締結後握手をするゾリグバートルモンゴル自然史博物館館長と政岡麻生大学学長

ておられ、モンゴルの生物学の世界ではたいへん知名度が高いことを知った。こうした先人のご努力により思わぬところで恩恵を受けたことはありがたかった。



図11 スライドによる投影の例

その後自然史博物館に移動して、恐竜の展示を見るなどしたあと、館長室で談笑した。この時点で近い将来日本でもモンゴルの動物についての展示をしたいとの意向が伝えられた（図14）。

会期中に10カ国以上の国から17,000名、モンゴルから16,000名もの訪問者があった。展示は非常に好評であり、標本に対してもスライドに対しても高い評価がなされた。ただし、動植物のプレートによるモンゴルの地方名調査はうまくゆかず、ほとんどは海外訪問者による記入であった。この展示はモンゴル市民の野生動物理解を少なからず深めたのみならず、海外からの多くの訪問者数にモンゴルの野生動物の魅力や価値を伝えることに貢献した。

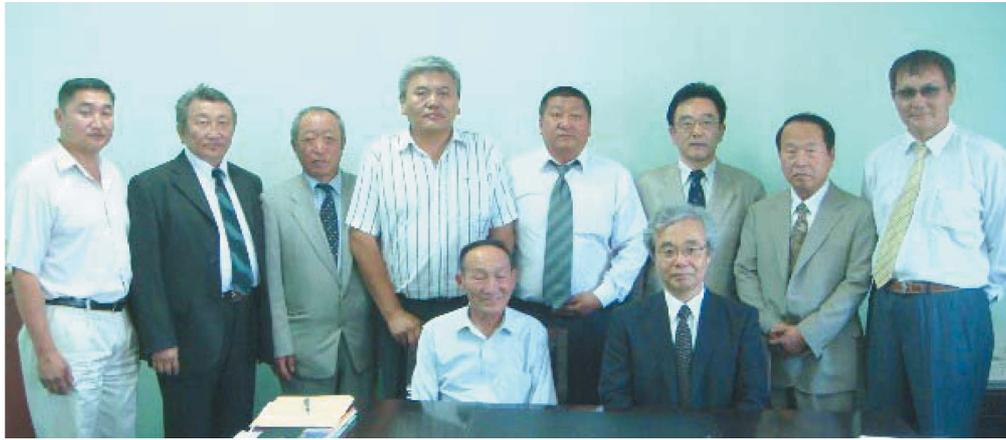


図13 左2人目より、バンディ・フスタイ国立公園管理責任者、一人おいて、サミヤ・モンゴル国立大学副学長、ゾリグバートル・モンゴル自然史博物館館長、高槻麻布大学教授。菅沼麻布大学国際交流委員長、ラグバスーレンモンゴル科学アカデミー生物学研究所教授、前列左より、ジャンチフ・モンゴル科学アカデミー生物学研究所所長、政岡麻布大学学長



図14 自然史博物館館長室にて：左より菅沼麻布大学国際協力委員長、政岡麻布大学学長、ゾリグバートル・モンゴル自然史博物館館長

謝辞：本プロジェクトは日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）海外調査平成19-20年度「アジア圏博物館ネットワークの構築，1. モンゴル」（代表鶴坂智則）によっておこなわれた。展示についてはモンゴル自然史博物館の全面的協力を得た。とくにゾリグバートル館長，ミヤングス事務長にはお世話になった。東京大学総合研究博物館には本プロジェクトをアジア圏博物館ネットワークとして位置づけていただいた。林良博館長にはモンゴルまでご足労いただき，ネットワーク構築にご尽力いただいた。西野嘉

章教授には展示のアドバイスを頂いた。在モンゴル大使館の市橋康生大使には開会式でご祝辞を頂戴した。モンゴル科学アカデミーのチャドラー所長には開会式でご祝辞を頂戴し，同アカデミーのラグバスーレン博士には共同研究の絆を深めていただいた。博士とは2002年以來共同研究者として野外調査をおこない，きびしい環境の中で野生動物調査のために苦楽を共にした。開会式での司会進行を含め博士の語学力と国際性はプロジェクトの成功に大きな貢献をした。鳥取大学の恒川篤史教授と伊藤健彦助教には野外調査をおこなうとともに，成果の一部を展示に使用することを快諾いただいた。麻生大学の政岡俊夫学長は林東京大学総合博物館館長とともにプロジェクト期間中に大学を移った高槻に対して，継続することをご理解いただき，学术交流協定締結にご尽力いただいた。これらの方々に衷心よりお礼申し上げます。

文 献

Ito T. Y., Miura N, Lhagvasuren B, Enkhbileg B, Takatsuki S, Tsunekawa A, Jiang Z. 2005. Satellite tracking of Mongolian gazelles (*Procapra gutturosa*) and habitat shifts in their seasonal ranges. *Journal of Zoology*, 269: 291-298.